

学歴社会意識とスチューデント・アパシーとの関係についての考察

安藤 聡一郎

[キーワード：①学歴社会意識 ②スチューデント・アパシー
③努力主義 ④アイデンティティ ⑤尤度比検定]

I. 問題

1. スチューデント・アパシーという問題

日本の大学生に見られるスチューデント・アパシーの問題は、エリクソン（1959）が示したモラトリアムとは質的に異なる病理として扱われてきた。エリクソンの発達段階論で見た場合、青年期における最大の課題はアイデンティティの確立である。しかし、日本の高度産業・高学歴社会は青年の自己確立を困難なものとし、登校拒否、いじめ、摂食障害など様々な病理を生み出している。スチューデント・アパシーも青年期にまつわる心理障害の一つであり、ウォルターズ（1961）がスチューデント・アパシーの特徴として「男らしさ形成をめぐる葛藤」を挙げ、山田（1983）がアパシーを「大人になれない青年の問題」と指摘するように、アパシー学生は男性性にこだわりつつも、自己を確立できない状態にある（表1参照）。もちろんエリクソンが「モラトリアム」という言葉で表現したように、近代社会に生きる全ての青年にとって自己の確立は難題であり、時間をかけなければ解決できない問題である。しかし、スチューデント・アパシーの学生は自らの問題と決して向き合おうとし

ないため、自分の人生に責任を取らない中途半端な状態が続き、いつまでたっても自己が確立された責任のある大人になることはない。これは、下山(1997)が指摘するように、スチューデント・アパシーにはアイデンティティの確立を目指すといった意識そのものが欠如しているためであるが、このことはエリクソンのアイデンティティ論では説明しきれない現象であり、日本社会の特異性がスチューデント・アパシーを形成していることが推察される(表2参照)。例えば、何年も大学生が留年することを許容する「甘え」の風土や、アパシー学生の特徴である強迫的的性格を助長しやすい伝統的な価値観など様々な要因が挙げられるが、多くの研究者によって特に関連が深いと思われるのが青年を取りまく日本の教育環境である。スチューデント・アパシーの形成因としてWalters(1961)が「価値の尺度を学業達成だけに限定」を、土川(1981)が「物質的豊かさ、大学生の量的拡大などの社会現象」を、山田(1986)が「秀才アイデンティティの挫折」を挙げていることや、スチューデント・アパシーが初めて問題化したのは大学進学率が急上昇した1960年代であり、学歴社会や受験戦争といったイメージが社会に浸透するのと平行してアパシー現象も問題となっていったことから、教育環境とアパシーとの関係の深さが推察できる。

表1

Walters のスチューデント・アパシーの概念

-
- ①学業に怠惰・低迷・無気力・無関心となり退却する。
 - ②困難や敗北が予想されるときは戦いを回避する。
 - ③他人を直接傷つける代わりに回避によって、間接的に攻撃衝動を満たす。
 - ④男性性の形成に関する問題で、男子学生に限る。
 - ⑤退却が学業のみなら軽症。生活全般に無気力・無関心が及ぶと重症。
 - ⑥学業達成のみに価値を置く。
 - ⑦大学の2年次に発生することが多い。
 - ⑧女性と成熟した相互関係を保てない。
-

表2 下山のスチューデント・アパシーの概念

-
- 心理的には無気力（アパシー）状態であるにもかかわらず、表面的な適応にこだわり続ける広範な様式で、青年期中期から成人期に渡る広い範囲で始まり、種々の状況で明らかとなる。以下のうち5つ以上。
- ①適応を期待する他者の気持ちを先取りした受動的な生活史（受動的適応性）。
 - ②適応的で自立している自己像への自己愛的な固執（自己愛的自立性）。
 - ③他者から不適応を批判されることに対する恐怖心と警戒心（強迫性）。
 - ④不適応があからさまになる場面の選択的回避（回避）。
 - ⑤不適応状況に関する事実経過を認めるが、その深刻さを否認（否認）。
 - ⑥不適応場面における、一貫性のない分裂した行動（分裂）。
 - ⑦自己の内的欲求が乏しく、自分のしたいことを意識できない（自分のなさ）。
 - ⑧感情体験が希薄で、生命感や現実感の欠如（実感のなさ）。
 - ⑨時間的展望がなく、その場しのぎの生活（張りのなさ）。
-

2. 学歴社会という名の虚像

スチューデント・アパシー学生は「良い子」である。母親のいうことをよく聞き、反抗期もなく、真面目で学業成績も優秀である。賞賛されて育ってきたためプライドは高いが、わがままに振舞うわけでもなく、むしろ他者の期待に合わせてきちんとしていようとする。しかし彼らは受験を勝ち抜いて一流大学に合格し、将来を嘱望されていた矢先、突然学校に行けなくなるのである。

学歴社会の勝利者がなぜ、スチューデント・アパシーに陥るのか。彼らは勝利者であるがゆえに、学歴社会の虚像が生み出す矛盾に最も強くさらされてしまうのである。

繰り返しになるが、現代の青年にとって自分の生き方を決めることは容易ではない。産業構造の変化によるサービス業の拡大は職業の選択肢を大幅に増やし、技術の高度化は就職までの道のりを困難にしている。

さらに親自身も価値観が揺らいでいるため子どもを厳しく育てることができず、子どもは親と共に生きる指針がないまま迷いの中におかれる。しかし、このような困難な状況であるにも関わらず、子どもは常に受験によって生き方を決定させる圧力にさらされ、生き方を考えるゆとりを与えられないのである。

このような二律背反的な状況下に置かれた子ども（およびその親）にとって、葛藤を逃れるための絶好の逃げ場が、学歴社会意識である。

学歴社会意識とは、「日本は学歴社会であり、学歴が高いほど将来は報われる」というイメージであり、人生を学歴という一つの尺度のみで捉える考え方である。もちろん高度経済成長時代と比べて学歴の威光は落ちており、今では「学歴は人生の落伍者にならないための最低ライン」という考え方が支配的となっているが（藤田、1991）、学歴という一つのものさしで人生を捉えようとする発想自体に変化はない。

藤田（1991）は、この一元的な意識の方向性こそが学歴社会意識の特徴であると指摘している。すなわち、現実の社会には実に多様な職業があり必要とされる能力や適性も多様なのに、学歴社会意識はすべての職業、多様な進路（学校）を一元的尺度に序列づけるのである。

何の基準もないまま無数の選択肢から生き方を選ぶ圧力にさらされた子ども（およびその親）にとって、学歴社会意識は多様な選択肢を一元的に序列づけてくれる点でありがたく、「学歴社会の波に乗っていれば（乗せていけば）、とりあえず生き方を間違えることはないだろう」という考え方は、自らの生き方を選ぶという葛藤から一時的に子ども（とその親）を解放してくれるのである。もちろんこの考え方が説得力を持つためには、多くの人間が学歴社会を信じていることが前提になるが、日本が世界一の学歴社会であるというイメージは世間一般に浸透しており、個人が学歴社会意識を信じやすい環境となっているのである。

しかし、日本は本当に学歴が高いほど将来が約束される社会なのだろうか？確かに戦前は（時期によって多少異なるにせよ）帝国大学はエ

リート養成機関であり、卒業生は日本社会の中核を担うことが約束されていた。時代を経るにしたがって受験競争も過熱していき大卒者と他との初任給の格差も縮まっていくが（表3参照）、それでも昭和3年時点で帝大卒と中卒との賃金格差は3倍あり（90円と35円）、大学生は学歴社会の恩恵を感じることができたのである。

しかし戦後、1960年代の高度経済成長と共に教育が大衆化するようになると状況は一変する。大卒者の数は急増し、表4、図1に示されるように大卒者といえども自動的に指導的立場になれるわけではないという状況になり（荻谷、2001）、学歴を獲得しても将来が保障されなくなったのである。

それにも関わらず、学歴社会意識は社会全体に信じられ続けてきた。高度経済成長に伴う産業構造の変化により生まれた大量のノンマニュアル職が高学歴者の就職先となったため、高学歴のホワイトカラーは絶対数としては大幅に増えたからである。また、「受験戦争」や「四当五落」に代表されるような「身を削ってでも一流大学を目指して戦う」イメージも学歴獲得競争を過熱させた。あれだけ多くの学生が必死に目指しているのだから、一流大学にはきっと価値があるに違いない、と子どもも親も考えたのである。しかし図1を見ると、たしかに経済成長と共にノンマニュアル職は拡大しているものの、その増加は高学歴者の増加に追いついておらず、就職率の点から見ると悪化の一途をたどっていることがわかる。バブル崩壊後の90年代の不況による大量のリストラ、エリートと見なされてきた高級官僚の相次ぐ不祥事は高学歴者の経済的優位性をさらに掘り崩した。終身雇用制の崩壊は学歴がもはや「落ちこぼれないための最低条件」にすらならないことを示し、高級官僚の不祥事はエリートへの嫌悪を増幅することになる。未だに日本での学歴社会意識は高いが、学歴社会は事実上崩壊したのである。

また、受験競争も実態とはかけ離れた虚像にすぎなかったのである。日本の公教育制度は能力主義的な平等を建前としたピラミッド型になっ

ている。個人の能力が平等であるということは、個人の学業上の成功／失敗の原因が努力要因に帰属されやすいことを意味するが、荻谷 (2001) はこの点について、日本の公教育は個人の能力の平等を前提とした「誰でも頑張れば成功する」という努力主義に基盤をおいているがゆえに、受験競争での成功を個人の努力に還元してしまうと指摘している。さらに、日本の教育制度は敗者復活が容易であるという特徴を持ち、それが努力主義を後押ししている。例えば中学受験に失敗しても高校受験、大学受験と敗者復活の機会が多く、将来の社会的地位がなかなか定まらない。その結果、「失敗しても努力すれば挽回のチャンスはある」と考えやすくなり、受験への動機づけは高まるのである。

このように日本の教育制度は学生の努力を煽る仕組みとなっているので、ワイナー等 (1971) の原因帰属理論から見ると、日本の公教育は個人の学業への動機づけを高め、受験へと向かわせやすくしているといえる。また、この仕組みがある程度機能しているからこそ、「四当五落」といった言葉に象徴されるような「合格するためには身を削る努力が必要だ」という受験戦争のイメージも生まれたのであろう。

しかし、努力主義が十分に機能するためには前提条件である「個人の能力の平等」が満たされることが必要となる。しかし実際には個人の資質や家庭環境、塾などの影響で人間一人一人の能力は平等ではないため、勉強しなくても学力の高い子やいくら勉強しても学力の低い子がでるなど、実態は努力主義の原則とは異なるのである。

さらに「四当五落」といわれる受験競争も実態とはまた異なる。1959年に全国30大学の入学生3095人に対して行った水野忠文の調査によれば、受験生時代の睡眠時間は、意外と十分あること (1～2月の受験直前の時期でも8時間前後)、受験生は健康にも留意していること、志望校の決定の時期 (最大値は東大=3年の夏休み前、他の大学はもっと遅く冬休み前) や受験勉強開始の時期 (3年生の夏休み前が最大値) が意外と遅いことなどが示された。さらに、荻谷 (2002) はこの調査結果を

踏まえた上で、4年制大学への入学率の推移を示している。それをよると、1959年当時の入学率は42.1%（ただし1959年の受験者の実数がわからないので、この値は推定値）しかなかったのに対し、入学率は60%前後を90年代半ばまで保ち、その後急上昇して2000年には80.5%にまで達している。このことから、氏は水野の調査当時と比較して現在の方が受験競争の圧力が少なくなっている、と結論づけている。

これらの結果から、努力主義とその産物である受験戦争のイメージが実態といかに異なっているかがわかる。もちろん大学の合格者たちが一所懸命に勉強してきたであろうことは疑いない。しかし受験戦争のイメージと実態のギャップがあるために、彼らが受験時代の自分の姿を「四当五落」の姿に照らし合わせたとき、自らが努力したがゆえに入学できたのではなく、能力があるために合格したという虚栄心が高まりやすくなってしまふのである。ワイナーの原因帰属理論によれば、成功／失敗の原因を努力に帰属させれば動機づけは高まるが、能力に帰属させれば動機づけは低下する。虚栄心にさえぎられて現実が見えなくなってしまう一方、学習意欲は低下させられるのである。

それゆえに、学歴社会を信じて生き方を模索してこなかった青年は大学に入って挫折感を味わう。本当ならば、学歴社会から離れ、自分の生き方を見つめ直すのが最善なのであろう。だが学歴社会から外れることは人生の落伍者になるというイメージがつきまとうだけに、入学した大学の偏差値が高ければ高いほど、学歴社会意識を捨てることは困難である。適応的に生きることには価値を置き、勝利することで周囲の賞賛を得てきた強迫性格の青年にとってはなおさらである。しかし学歴社会の恩恵はすでになく、目前に迫った就職の時期が、自らの生き方を考えてこなかったという現実を彼らにつきつける。再び青年は生き方の選択を迫られるが、次節で詳述するように彼らは学歴社会の勝利者というプライドを植え付けられているため、自らの（生き方を考えてこなかったという）失敗を認めることができない。かつて学歴意識に逃げた青年は、ま

たしても自らの問題と向き合うことができず、人生から逃げ出すこととなる。スチューデント・アパシーが誕生することになる。

表 3

学歴別初任給		三菱合資会社関係 (昭和3年)	
三井鉱業 (大正8年)			
帝大	工科 50円 法科 40円	帝 国 大 学	
高商	東京高商 (商業士) 40円	医 科	90円
	(普通) 35円	工 科	90円
	神戸高商 35円	法 科	80円
高工	地方高商 30円	文 科	80円
	東京高工 30円	商 科 大 学 大 学 部	75円
慶大	地方高工 30円	慶 大 専 門 部	75円
	慶大 30円	早 大	75円
早大	政治経済科 30円	神 戸 高 商	75円
	理工科 35円	地 方 高 商	65円~70円
県立高工	甲種商業 18円	中央・法政・明治各大学部	65円~70円
	甲種工業 18円	私 大 各 専 門 部	50円~60円
早稲田実業	18円	中 学 程 度	35円
三田高工	18円		

出典：「初給を幾ら増されたか」『実業之日本』第22巻16号 1919

出典：前田一「サラリマン物語」東洋経済出版部 1928

表 4

大学別事務系中間管理職輩出率 (1959年卒・入社)

大 学 名	中間管理職	非管理職*	合計 (入社数)	輩出率
東大・京大・一橋大	127人	173人	300人	42.3%
早大・慶大	146	282	428	34.1
北大・東北大・名大・阪大・九大・神大・大市大	75	160	235	31.9
上記以外の国公立大学	88	191	279	31.5
上記以外の私立大学	121	337	458	26.4
計	557	1,143	1,700	32.8

出所) 竹内・1981・111.

注) *退職, 死亡などを含む.

学校教育の量的拡大

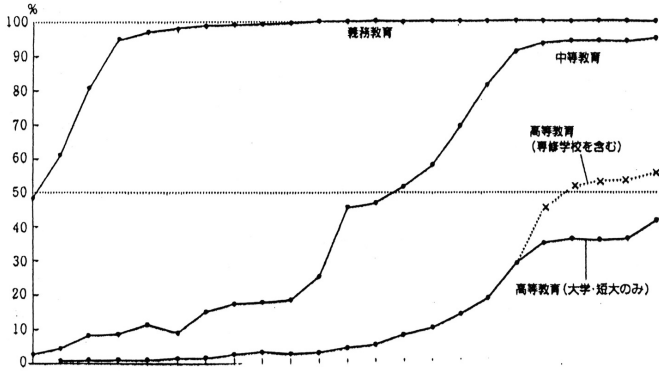


図 1

3. 研究の目的

以上の考察により、学歴社会意識と受験戦争イメージがスチューデント・アパシーの形成因となっていることが示唆された。そこで本研究では一般大学生を対象にスチューデント・アパシーと学歴社会意識および受験への努力との関連を検討することを第一の目的とする。結果には性差の他、学校差が反映していると思われたので、国立トップクラス大学の一つであるX大学と私立Y大学の2校でデータを取り、比較検討する。学歴社会は男性を中心とした高学歴者が優遇される社会のことであることから、学歴社会意識と受験への努力は男性のアパシー傾向とは関連が深く、女性のアパシー傾向とはあまり関連が出ないことが予想される。また、国立トップX大生は学歴社会の頂点に位置するがゆえに、Y大生より学歴社会意識や努力主義とアパシーとの関連が深くなることも予想される。

研究の手順として、まず学歴社会意識測定尺度、受験努力測定尺度を作成し、アパシー心理性格尺度（下山、1992）、アイデンティティ基礎測定尺度（下山、1992）と合わせて信頼性を検討する。次にアパシー傾

向とアイデンティティ基礎、学歴社会意識、受験努力との関係を検討する。アイデンティティ基礎との分析においては性差について、後の二つとの分析においては性差と学校差（国立トップX大学と私立Y大学）についても検討する。

II. 方法

1. 尺度の作成

1) 学歴社会意識尺度（3項目）

質問項目の作成に当たり、藤田（1991）など学歴社会を扱った教育社会学の文献を主に参考にした。項目の妥当性検査は心理学専攻の教員と複数の大学院生により行われ、内容や言葉遣いの適切性が確認された。2002年10月に行われた予備調査を元に作成された5項目について因子分析（主因子法）を行い、固有値の大きさ1.0以上及び因子負荷量3.5以上を基準として1因子としてまとめた3項目を尺度として決定した（表5参照）。尺度の信頼性は3項目全体について α 係数による信頼性係数を算出することで確認したところ、 $\alpha = .726$ となっており、この観点からの信頼性は十分高いと言える。項目分析は、項目と総得点との間の相関係数を算出することによって行われ、すべて1%水準で有意な相関($r = .733 \sim .857$)であった。

2) 受験努力尺度（3項目）

質問項目の作成に当たり、荻谷（2002）の大学受験の現状に関する研究や、水野（1963）の大学受験生の受験生活の心身への影響に関する調査を参考にした。項目の妥当性検査は心理学専攻の教員と複数の大学院生により行われ、内容や言葉遣いの適切性が確認された。2002年10月に行われた予備調査を元に作成された5項目について因子分析（主因子法）を行い、固有値の大きさ1.0以上及び因子負荷量3.5以上を基準として1

因子としてまとめた3項目を尺度として決定した（表6参照）。尺度の信頼性は3項目全体について α 係数による信頼性係数を算出することで確認したところ、 $\alpha = .703$ となっており、この観点からの信頼性は十分高いと言える。項目分析は、項目と総得点との間の相関係数を算出することによって行われ、すべて1%水準で有意な相関（ $r = .753 \sim .810$ ）であった。

表5

学歴意識尺度	α 係数	総項目得点との相関係数
48.良い大学を卒業することで、社会で成功する道が開ける。	$\alpha = .726$.821(**)
49.良い大学に入ることは、社会で失敗しないための保険にはなる。		.857(**)
20.大学を卒業しないと、道を踏み外した気がする。		.733(**)
		** 相関係数は1%水準で有意

表6

受験努力尺度	α 係数	総項目得点との相関係数
32.進学準備のための学習が、毎日の生活の励みになった。	$\alpha = .703$.753(**)
33.受験のときは、勉強に没頭していた。		.810(**)
35.大学に合格するために努力してきたと感じる。		.785(**)
		** 相関係数は1%水準で有意

2. 調査対象者

尺度作成には、国立トップX大学および私立Y大学の大学1年生合計251名（男子143名、女子108名）。なお本研究の目的の一つに受験勉強に対する態度とアパシーとの関連の調査があることから、後の分析には学習院大学の被験者は推薦入試等による入学者を除外し、受験入学者に限定した（男子117名、女子61名）。

3. 調査に用いた尺度

(1) アパシー心理性格尺度（下山、1997）20項目（表7参照）。(2) アイデンティティの基礎尺度（下山、1992のアイデンティティ尺度の下位尺度10項目。アイデンティティの未熟さを測定する）（表8参照）。

表 7

アバシー心理性格尺度 (*は逆転項目)
6. よく眠れて朝は爽快な気分で起きられる。 (*)
11. 毎日何となく無駄に過ごしている。
14. いつも頭がぼんやりしている。
15. 朝起きて夜眠る生活のリズムが乱れている。
18. 時間がただ過ぎていくという感じがある。
1. 一度決めたことでも人から言われると決心が変わりやすい。
5. 自分が本当に何をやりたいのかわからない。
7. 自分の将来といっても現実感がない。
13. 自分のしていることに自信がない。
20. 何となく大学まで来てしまったという感じがある。
2. 心から楽しいと感じるときがある。 (*)
3. 自分の人生を生きているという実感がない。
10. 何事も生き生き感じられない。
17. 人に対して自分の意見や考え方をはっきりと主張する。 (*)
19. 自分の悩みを何でも話せる友人がいる。 (*)
4. きちんとしていないと気が済まない。
8. 人からの批判がとてмо気になる。
9. 自分が何をしたいかよりも何が自分に期待されているかを優先する。
12. 勝ち負けにこだわる。
16. 自分の弱みを人に知られたくない。
尺度全体の α 係数

表 8

アイデンティティ基礎尺度
21. 私は、やりそこないをしないかと心配ばかりしている。
22. 私の心は、とても傷つきやすく、もろい。
23. 異性とのつきあい方がわからない。
24. 何かしているより空想に耽っていることが多い。
25. 私は、人が見ているとうまくやれない。
26. 私は、どうしたらよいかわからなくなると自分の殻の中に閉じこもってしまう。
27. 自分一人で初めてのことをするのは不安だ。
28. まわりの動きについていけず、自分だけ取り残されたと感じることがある。
29. 私は、人と活発に遊べない。
30. 自分の中には、常に漠然とした不安がある。

（3）学歴社会意識尺度3項目。（4）受験努力尺度3項目。

上記の尺度を質問紙とし、授業時間を利用して集团的に施行した。調査時期は2002年10～11月で、所要時間は10～20分であった。被験者を大学1年生に限定したのは、本研究の対象がスチューデント・アパシー学生であること、ウォルタース（1961）等の先行研究によればスチューデント・アパシーが授業から撤退する時期が主に2年次の夏までであることを考慮したからである。アパシー傾向を測定する尺度に下山（1992）を用いたのは、病理としてのアパシーの特徴である強迫的性格やアンヘドニアを尺度に組み込んであり（下位尺度の「適応強迫」5項目、「実感のなさ」5項目が相当）、スチューデント・アパシーの全体像を捉えるのに既存の尺度の中では最も適していると判断したからである。また下山（1992）のアイデンティティの基礎尺度を用いたのは、下山（1997）が共分散構造分析で示した「アイデンティティの未熟さが大学に関する意欲低下を招く」という結果を踏まえ、アイデンティティの未熟さとスチューデント・アパシー傾向との関連が男女のアパシーに共通するかの調査を意図したからである。

質問紙の各尺度は1点（まったく当てはまらない）～7点（とても良く当てはまる）の7件法で評定され、各項目の合計点を尺度の総得点とした。各尺度についての詳細は以下の通りである。

Ⅲ. 結果

分析1：アパシー傾向の大学、性別による分布

被験者をアパシー心理性格尺度の総得点の75パーセンタイルで2分し、高得点者（106点～140点）をアパシー傾向高群、低得点者（20点～105点）をアパシー傾向低群と名づけた。被験者を中央値ではなく75パーセンタイルで区切ったのは、本研究の関心の対象がスチューデント・アパシー状態に陥る恐れのある水準の学生にあるからである。

表 9

		アパシー傾向		計
		高 (25%)	低 (75%)	
東大	男性	45 (57.7)	33 (42.3)	78
	女性	9 (39.1)	14 (60.9)	23
学習院大	男性	26 (66.7)	13 (33.3)	39
	女性	15 (39.5)	23 (60.5)	38
東大		54 (53.5)	47 (46.5)	101
学習院大		41 (53.2)	36 (46.8)	77
男性		71 (60.7)	46 (39.3)	117
女性		24 (39.3)	37 (60.7)	61

カッコ内は比率

表 9.1

変動源	自由度	χ^2 乗	p	尤度比	p
学校 * アパシー	1	0.001	ns	0.001	ns
性別 * アパシー	1	7.337	0.01	7.366	0.01
学校 * 性別 * アパシー	1	0.841	ns	0.887	ns
計	3	8.179	0.05	8.254	0.05

アパシー傾向の高群、低群は学校別(国立トップX大学と私立Y大学)、性別により分けられ、2 (アパシー高低) * 2 (国立トップX大学と私立Y大学) * 2 (性差) の尤度比検定が実施された(表9参照)。性別とアパシーとの間に有意な関係が見られる(尤度比=7.366、 $p < .01$ 、表9.1参照)が、表10で、男性の60.7%がアパシー傾向高群なのに対し、女性では39.3%にすぎないことを反映している。また残差分析の結果から、私立Y大男子学生は国立トップX大男子学生よりアパシー傾向の高い者が多く、私立Y大女子学生は国立トップX大女子学生よりアパシー傾向の低い者が多いことがわかる(表9.2参照)。これらの結果から、女性と比べて男性の方がアパシー傾向の高い者が多いこと、国立トップX大生よりも私立Y大生の方が、アパシー傾向の男女差が大きいことが明らかになった。

表 9.2

学校	性別	アパシー	度数	期待値	ずれ	誤差	調整後の残差
東大	男性	高	45	41.63	3.37	3.3	1.02
東大	男性	低	33	36.37	-3.37	3.3	-1.02
東大	女性	高	9	12.28	-3.28	2.23	-1.47
東大	女性	低	14	10.72	3.28	2.23	1.47
学習院大	男性	高	26	20.81	5.19	2.75	1.88 p<.10
学習院大	男性	低	13	18.19	-5.19	2.75	-1.88 p<.10
学習院大	女性	高	15	20.28	-5.28	2.73	-1.94 p<.10
学習院大	女性	低	23	17.72	5.28	2.73	1.94 p<.10

分析 2：アパシー傾向と諸要因との関係

アパシー傾向と諸要因との関係を調べた先行研究の多くは、鉄島（1993）のように重回帰分析など多変量解析を用いたものが多い。しかし、本研究では以下の3つの理由に基づき、重回帰分析ではなく尤度比検定を用いた。

- A) 各尺度（アイデンティティ基礎、学歴意識、受験努力）の規準得点が不明であり、重回帰分析の独立変数として標準偏回帰係数を比較する意味がないため。
- B) 本研究の関心がアパシー傾向の極めて高い者とそうでない者との間の質的な差であり、アパシー傾向の連続的な線形関係には関心がないため。
- C) アパシー尺度の総得点と各尺度の総得点との関係を散布図で見たと、線形関係の分析に適さないと考えられたため。

結果は性差が予想されたため、分析はアパシー傾向*諸要因*性別の3要因の尤度比検定を用いて行った。アパシー傾向と学歴社会意識、受

表 10

	アパシー傾向		計
	高 (25%)	低 (75%)	
男性			
アイデンティティ高	60 (72.3)	23 (27.7)	83
アイデンティティ低	11 (32.4)	23 (67.6)	34
女性			
アイデンティティ高	21 (60)	14 (40)	35
アイデンティティ低	3 (11.5)	23 (88.5)	26
	アパシー傾向		計
	高 (25%)	低 (75%)	
アイデンティティ高	81 (68.7)	37 (31.3)	118
アイデンティティ低	14 (23.3)	46 (76.7)	60

カッコ内は比率

験努力との関係では、学校間の差も予想されたため、国立トップX大学と私立Y大学の2校の学生を分けて検討を行った。

1. アイデンティティ基礎とアパシー傾向との関係

2 (アパシー傾向高低) * 2 (アイデンティティ基礎高低) * 2 (性差) の尤度比検定を行った (表10参照)。アパシー傾向の高群と低群を前述の理由から75パーセンタイルで、アイデンティティ基礎の高群と低群を中央値で分けて分析したところ、アパシー傾向とアイデンティティ基礎、アパシー傾向と性差との間に有意な関係があった (それぞれ尤度比33.985 $p < .01$ 、尤度比7.366 $p < .01$ 、表10.1参照)。アパシー傾向とアイデンティティ基礎との関係は、表11によれば、アイデンティティ基礎の未熟な者の68.7%がアパシー傾向高群に入っているが、アイデンティティ基礎の確立した者では23.3%しかアパシー傾向高群に入っていないことを反映している。アイデンティティ基礎とアパシー傾向との関係が、男女を問わず見られることが明らかになった。アパシー傾向と性差との関係については、分析1で先述したので省略する。

表 10.1

変動源	自由度	χ^2 二乗	p	尤度比	p
性別*アイデンティティ	1	3.301	ns	3.252	ns
性別*アパシー	1	7.337	0.01	7.366	0.01
アイデンティティ*アパシー	1	32.814	0.01	33.985	0.01
性別*アイデンティティ*アパシー	1	1.479	ns	-1.887	ns
計	4	44.93	0.01	42.716	0.01

表 10.2

性別	-	アイデンティティ	-	アパシー	度数	期待値	ずれ	誤差	調整後の残差
男性	-	高	-	高	60	41.4	18.6	3.67	5.07 p<.01
男性	-	高	-	低	23	36.17	-13.17	3.58	-3.67 p<.01
男性	-	低	-	高	11	21.05	-10.05	3.19	-3.15 p<.01
男性	-	低	-	低	23	18.39	4.61	3.1	1.49
女性	-	高	-	高	21	21.58	-0.58	3.21	-0.18
女性	-	高	-	低	14	18.86	-4.86	3.12	-1.56
女性	-	低	-	高	3	10.97	-7.97	2.66	-3.00 p<.01
女性	-	低	-	低	23	9.59	13.41	2.54	5.27 p<.01

3 次元表の分析からアイデンティティの未熟さとアパシー傾向との連関が男女を問わず当てはまることが確認されたが、残差分析からは逆に性差が読み取れる（表10.2参照）。男子はアイデンティティ基礎の未熟さとアパシー傾向の高さとの間に有意な関係が見られるのに対し、女子はアイデンティティ基礎の確立している者とアパシー傾向の低さとの間に有意な関係が見られる一方、アイデンティティ基礎の未熟さとアパシー傾向の高さとの間には有意な関係は見られない。

2. 学歴社会意識とアパシー傾向との関係

まず、学歴社会意識とアパシー傾向、性別との関係を調べるために2（アパシー傾向高低）*2（学歴社会意識高低）*2（性差）の尤度比検定を行った（表11参照）。学歴社会意識の高群と低群を中央値で分け

表 11

	アバシー傾向		計
	高 (25%)	低 (75%)	
男性			
学歴社会意識高	43 (62.3)	26 (37.7)	69
学歴社会意識低	28 (58.3)	20 (41.7)	48
女性			
学歴社会意識高	16 (40.0)	24 (60.0)	40
学歴社会意識低	8 (38.1)	13 (61.9)	21
	アバシー傾向		計
	高 (25%)	低 (75%)	
学歴社会意識高	59 (54.1)	50 (45.9)	109
学歴社会意識低	36 (52.2)	33 (47.8)	69

カッコ内は比率

表 11.1

変動源	自由度	χ^2 二乗	p	尤度比	p
性別*学歴社会意識	1	0.736	ns	0.741	ns
性別*アバシー	1	7.337	0.01	7.366	0.01
学歴社会意識*アバシー	1	0.065	ns	0.065	ns
性別*学歴社会意識*アバシー	1	0.065	ns	0.144	ns
計	4	8.202	ns	8.316	ns

表 11.2

性別	-	学歴社会意識	-	アバシー	度数	期待値	ずれ	誤差	調整後の残差
男性	-	高	-	高	43	38.24	4.76	3.66	1.30
男性	-	高	-	低	26	33.41	-7.41	3.57	-2.08 p<.05
男性	-	低	-	高	28	24.21	3.79	3.33	1.14
男性	-	低	-	低	20	21.15	-1.15	3.24	-0.35
女性	-	高	-	高	16	19.94	-3.94	3.17	-1.24
女性	-	高	-	低	24	17.42	6.58	3.07	2.15 p<.10
女性	-	低	-	高	8	12.62	-4.62	2.8	-1.65 p<.10
女性	-	低	-	低	13	11.03	1.97	2.68	0.74

て分析したところ、アパシー傾向と性差との間にのみ有意な関係（尤度比7.366 $p < .01$ ）が見られ、学歴社会意識と他の要因との間に有意な関係は見られなかった（表11.1参照）。

残差分析からは、男性が学歴社会意識に関わらずアパシー傾向が高いのに対し、女性は学歴社会意識に関わらずアパシー傾向が低いことがわかる（表11.2参照）。表11.2からは男性では学歴社会意識高群の方が若干アパシーの高さと関係があるとも読めるが、有意な差を示すほどではない。

次に、学歴社会意識とアパシー傾向、学校差（国立トップX大学と私立Y大学）との関係を調べるために2（アパシー傾向高低）*2（学歴社会意識高低）*2（国立トップX大学と私立Y大学）の尤度比検定を行った。先の分析で性差によって結果が異なることが示唆されていたため、分析は男女別に行った。

男性の被験者には3次の交互作用が見られた（尤度比4.132 $p < .05$ 、表12.1参照）。これは、表12から、国立トップX大男子は学歴社会意識が高くなるほどアパシー傾向高群の占める割合が46.7%→64.6%と増えているが、私立Y大男子は逆に77.8%→57.1%と減っていることから生じている。残差分析からも、国立トップX大生には学歴社会意識とアパシー傾向とに正の連関が見られるのに対し、私立Y大生には負の連関が見られる、という結果が読み取れる（表12.2参照）。

表 12

	アパシー傾向		計
	高 (25%)	低 (75%)	
東大男性			
学歴社会意識高	31 (64.6)	17 (35.4)	48
学歴社会意識低	14 (46.7)	16 (53.7)	30
学習院大男性			
学歴社会意識高	12 (57.1)	9 (42.9)	19
学歴社会意識低	14 (77.8)	4 (22.2)	18

カッコ内は比率

表 12.1

変動源	自由度	χ^2 二乗	p	尤度比	p
学校*学歴社会意識	1	0.636	ns	0.633	ns
学校*アバシー	1	0.878	ns	0.888	ns
学歴社会意識*アバシー	1	0.188	ns	0.188	ns
学校*学歴社会意識*アバシー	1	4.15	0.05	4.132	0.05
計	4	5.852	ns	5.84	ns

表 12.2

学校	-	学歴社会意識	-	アバシー	度数	期待値	ずれ	誤差	調整後の残差
東大	-	高	-	高	31	27.91	3.09	3	1.03
東大	-	高	-	低	17	18.09	-1.09	2.76	-0.39
東大	-	低	-	高	14	19.42	-5.42	2.8	-1.93 p<.10
東大	-	低	-	低	16	12.58	3.42	2.55	1.34
学習院大	-	高	-	高	12	13.96	-1.96	2.59	-0.75
学習院大	-	高	-	低	9	9.04	-0.04	2.32	-0.02
学習院大	-	低	-	高	14	9.71	4.29	2.37	1.81 p<.10
学習院大	-	低	-	低	4	6.29	-2.29	2.07	-1.11

表 13

	アバシー傾向		計
	高 (25%)	低 (75%)	
東大女性			
学歴社会意識高	7 (50)	7 (50)	14
学歴社会意識低	2 (22.2)	7 (77.8)	9
学習院大女性			
学歴社会意識高	9 (34.6)	17 (65.4)	26
学歴社会意識低	6 (50)	6 (50)	12

カッコ内は比率

女性の被験者に関しては各要因の間に有意な関係は見られなかった(表13、13.1参照)。残差分析からは、男性と同様、国立トップX大生には学歴社会意識とアバシー傾向とに正の連関が見られるのに対し、私立

表 13.1

学校	-	学歴社会意識	-	アバシー	度数	期待値	ずれ	誤差	調整後の残差
東大	-	高	-	高	7	1.07	1.07	1.79	0.6
東大	-	高	-	低	7	9.15	-2.15	1.97	-1.09
東大	-	低	-	高	2	3.12	-1.12	1.46	-0.76
東大	-	低	-	低	7	4.8	2.2	1.68	1.31
学習院大	-	高	-	高	9	9.8	-0.8	2	-0.4
学習院大	-	高	-	低	17	15.11	1.89	2.17	0.87
学習院大	-	低	-	高	6	5.15	0.85	1.72	0.5
学習院大	-	低	-	低	6	7.93	-1.93	1.91	-1.01

表 13.2

学校	-	学歴社会意識	-	アバシー	度数	期待値	ずれ	誤差	調整後の残差
東大	-	高	-	高	7	1.07	1.07	1.79	0.6
東大	-	高	-	低	7	9.15	-2.15	1.97	-1.09
東大	-	低	-	高	2	3.12	-1.12	1.46	-0.76
東大	-	低	-	低	7	4.8	2.2	1.68	1.31
学習院大	-	高	-	高	9	9.8	-0.8	2	-0.4
学習院大	-	高	-	低	17	15.11	1.89	2.17	0.87
学習院大	-	低	-	高	6	5.15	0.85	1.72	0.5
学習院大	-	低	-	低	6	7.93	-1.93	1.91	-1.01

Y大生には負の連関が見られる、という結果が読み取れるが、その傾向は男性ほど顕著ではなかった（表13.2参照）。

表 14

	アバシー傾向		計
	高 (25%)	低 (75%)	
男性			
受験努力高	40 (52.6)	36 (47.4)	76
受験努力低	31 (75.6)	10 (24.4)	41
女性			
受験努力高	11 (30.6)	25 (69.4)	36
受験努力低	13 (52.0)	12 (48.0)	25
	アバシー傾向		計
	高 (25%)	低 (75%)	
受験努力高	51 (45.5)	61 (54.5)	112
受験努力低	44 (66.7)	22 (33.3)	66

カッコ内は比率

表 14.1

変動源	自由度	χ^2 乗	p	尤度比	p
性別*受験努力	1	0.607	ns	0.603	ns
性別*アバシー	1	7.337	0.01	7.366	0.01
受験努力*アバシー	1	7.451	0.01	7.56	0.01
性別*受験努力*アバシー	1	0.014	ns	1.39	ns
計	4	15.408	0.01	16.919	0.01

3. 受験努力とアバシー傾向との関係

まず受験努力とアバシー傾向、性別との関係を知るため、2（アバシー傾向高低）* 2（受験努力高低）* 2（性差）の尤度比検定を行った。受験努力の高群と低群を中央値で分けて分析したところ、性別とアバシー傾向、受験努力とアバシー傾向との間に有意な関係があった（それぞれ尤度比7.366 p<.01、尤度比7.560 p<.01、表14.1参照）。

受験努力とアバシー傾向との有意な関係は、表14によれば、受験努力高群でアバシー傾向高群に分類される者が45.5%しかいなかったのに対し、受験努力低群では66.7%もいたことが反映されている。また残差分析からは、男性は受験努力低群とアバシー傾向高群との間に有意な関係が見られるのに対し、女性は受験努力高群とアバシー傾向低群との間に有意な関係が見られることがわかる（表14.2参照）。

表 14.2

性別	受験努力	アパシー	度数	期待値	ずれ	誤差	調整後の残差
男性	高	高	40	39.29	0.71	3.66	0.19
男性	高	低	36	34.33	1.67	3.57	0.47
男性	低	高	31	23.15	7.85	3.29	2.38 p<.05
男性	低	低	10	20.23	-10.23	3.19	-3.20 p<.01
女性	高	高	11	20.48	-9.48	3.19	-2.98 p<.01
女性	高	低	25	17.9	7.1	3.09	2.30 p<.05
女性	低	高	13	12.07	0.93	2.75	0.34
女性	低	低	12	10.55	1.45	2.64	0.55

表 15

	アパシー 傾向		計
	高 (25%)	低 (75%)	
東大男性			
受験努力高	29 (54.7)	24 (45.3)	53
受験努力低	16 (64.0)	9 (36.0)	25
学習院大男性			
受験努力高	11 (47.8)	12 (52.2)	23
受験努力低	15 (93.8)	1 (6.2)	16

カッコ内は比率

次に、受験努力とアパシー傾向、学校差（国立トップX大学と私立Y大学）との関係を調べるために2（アパシー傾向高低）*2（受験努力高低）*2（国立トップX大学と私立Y大学）の尤度比検定を行った。性差によって結果が異なることが考えられるため、分析は男女別に行った。

表15.1から、男性の被験者には受験努力とアパシー傾向との間に有意な関係があり（尤度比6.111 p<.05）、3次の交互作用もあった（尤度比4.819 p<.05）ことがわかる。

受験努力とアパシー傾向との間の有意な差は、表15によれば、受験努

表 15.1

変動源	自由度	χ^2 乗	p	尤度比	p
学校*受験努力	1	0.92	ns	0.91	ns
学校*アパシー	1	0.878	ns	0.888	ns
受験努力*アパシー	1	5.894	0.05	6.111	0.05
学校*受験努力*アパシー	1	4.192	0.05	4.819	0.05
計	4	11.884	0.05	12.729	0.05

表 15.2

学校	受験努力	アパシー	度数	期待値	ずれ	誤差	調整後の残差
東大	高	高	29	30.75	-1.75	3.01	-0.58
東大	高	低	24	19.92	4.08	2.79	1.46
東大	低	高	16	16.59	-0.59	2.68	-0.22
東大	低	低	9	10.75	-1.75	2.43	-0.72
学習院大	高	高	11	15.37	-4.37	2.63	-1.66 p<.10
学習院大	高	低	12	9.96	2.04	2.38	0.86
学習院大	低	高	15	8.29	6.71	2.25	2.98 p<.01
学習院大	低	低	1	5.37	-4.37	1.95	-2.25 p<.05

力高群の中でアパシー傾向高群に属する者は52.6%しかいないのに対し、受験努力低群では75.6%と多いことから生じている。3次の交互作用は、受験に努力しなかったと考えるほどアパシー傾向が低くなるという傾向自体は国立トップX大学、私立Y大学とも変わらなかったが、国立トップX大生は努力高群、低群の中でアパシー傾向高群に当てはまる者がそれぞれ54.7%、64.0%であったのに対し、私立Y大生はそれぞれ47.8%と93.8%と差が大きかったことが反映されている。

この傾向は残差分析からも確認される（表15.2参照）。私立Y大の男子学生は受験に努力しないほどアパシー傾向が高まるという結果が明確に出ているのに対し、国立トップX大の男子学生には受験努力とアパシー傾向との関係は殆ど見られない。

一方女子学生の分析では、3次元表では各要因の間に有意な関係は見

表 16

	アバシー傾向		計
	高 (25%)	低 (75%)	
東大女性 受験努力高 受験努力低	4 (28.6)	10 (71.4)	14
	5 (55.6)	4 (44.4)	9
学習院大女性 受験努力高 受験努力低	7 (31.8)	15 (68.2)	22
	8 (50)	8 (50)	16

カッコ内は比率

表 16.1

変動源	自由度	χ^2 乗	p	尤度比	p
学校*受験努力	1	0.052	ns	0.053	ns
学校*アバシー	1	0.001	ns	0.001	ns
受験努力*アバシー	1	2.843	ns	2.839	ns
学校*受験努力*アバシー	1	0.099	ns	0.113	ns
計	4	2.995	ns	3.005	ns

表 16.2

学校	-	受験努力	-	アバシー	度数	期待値	ずれ	誤差	調整後の残差
東大	-	高	-	高	4	5.34	-1.34	1.75	-0.77
	-	高	-	低	10	8.23	1.77	1.95	0.91
東大	-	低	-	高	5	3.71	1.29	1.56	0.83
	-	低	-	低	4	5.72	-1.72	1.78	-0.96
学習院大	-	高	-	高	7	8.82	-1.82	1.98	-0.92
	-	高	-	低	15	13.6	1.4	2.16	0.65
学習院大	-	低	-	高	8	6.13	1.87	1.82	1.03
	-	低	-	低	8	9.45	-1.45	2.01	-0.72

られなかった（表16、16.1参照）。残差分析からは、受験努力とアバシーとの間に正の連関が見られるが、国立トップX大生と私立Y大生との間に有意な差はなく、先の分析結果を再確認するものにとどまっている（表16.2参照）。

IV. 考察

1. 学歴社会意識、受験努力とアパシー傾向との関係

学歴社会意識とアパシー傾向とに正の連関があるとする仮説は、男子の学校別の分析において3次の交互作用が出たことから、ある程度支持されたと言える。国立トップX大学の男子学生にはアパシー傾向と学歴意識との間に正の連関が、私立Y大学の男子学生には負の連関が見られたことから、学歴社会意識がアパシー傾向を高めるのは学歴的価値の高い大学に所属する学生に限ると考えられるからである。しかし、5%水準での有意な関係であったことから、学歴社会意識とアパシーとの直接的な関係はそれほど大きくはないとも言える。

私立Y大学の男子学生に、アパシー傾向と学歴意識との間で負の連関が見られたのは予想外であった。これは、私立Y大学生が自らを学歴社会の勝利者と見なしていないためにこのような結果になったとも思われる。学歴意識が高いほど自分の境遇に劣等感を感じると共にそれをバネとして頑張ろうという気概も生まれた結果、アパシー傾向が弱まるとも考えられるからである。とはいえ、検証のためには、今後更なる調査が必要と思われる。

受験努力とアパシー傾向との関係についても、受験に努力しなかったと考えることと高いアパシー傾向との間に有意な連関が出たことで、仮説は支持されたと言える。また学校別の分析からは、私立Y大学の男子学生は受験に努力しないほどアパシー傾向が高まるという結果が明確に出たのに対し、国立トップX大学の男子学生には受験努力とアパシー傾向との関係は殆ど見られないという結果が出た。これは予想されていたのとは逆の結果であり予想外であった。学歴に基づく序列という要素以外の国立トップX大学と私立Y大学との質的な差が反映していると思われる、今後の課題として残った。

結論としては、学歴意識や受験努力が男性の高いアパシー傾向と関係

があることが確認されたことで、これらのイメージがスチューデント・アパシーの形成因となり得ることが示されたと言える。アパシーが問題となり始めたころと比べ、現代では学歴社会の虚像と実態とのギャップはますます広がっているといえ、懸念される。

2. アパシー傾向の性差による構造の違い

次に、アパシー構造の性差についての検討に移る。アパシー傾向とアイデンティティの未熟さとの間の有意な正の連関は、男女共通に確認された。しかし、男子ではアイデンティティ基礎の未熟さとアパシー傾向の高さとの間に有意な関係が見られるのに対し、女子はアイデンティティ基礎の未熟さとアパシー傾向の高さとの間に有意な関係が見られないことから、アイデンティティの未熟さが病的な水準のアパシーにまでつながるのは男性のみであることがわかった。次に分析1からは、男性の60.7%がアパシー傾向高群なのに対して女性では39.3%にすぎないことから、男性の方がアパシーになりやすいことが示唆された。

学歴社会意識とアパシー傾向との関係については、女性に関しては学校差を含め、有意な関係は一切検出されなかった。残差分析からは国立トップX大生には学歴意識とアパシー傾向とに正の連関が見られるのに対し、私立Y大生には負の連関が見られる、という男性と同様の結果が読み取れたが、有意な関係ではなかったことから、学歴社会意識が女性のアパシー形成に及ぼす影響は、男性よりも小さいことが分かる。

受験努力とアパシー傾向との関係については、女性も男性と同様に、正の連関が示された。しかし男性は受験努力低群とアパシー傾向高群との間に有意な関係が見られるのに対し、女性は受験努力高群とアパシー傾向低群との間にのみ有意な関係が見られている。女性の受験努力低群とアパシー傾向高群との間に有意な関係が見られなかったということは、受験に努力しなかったことと病理としてのアパシーとの間に直接的な関係がないことを示していると考えられる。

学歴社会意識と受験努力に関してこのような結果が示された理由としては「学歴社会とは言っても女性の高学歴者は優遇されない」と女性が捉えられている可能性や、「学業へのこだわり」が男らしさと関係しているため、女性のアパシーとの連関が出なかった可能性などが考えられる。

アイデンティティの未熟さ、学歴社会意識、受験努力の3つの下位尺度すべてにおいて、男性のアパシー傾向高群とは正の連関を示した一方、女性のアパシー傾向高群とは示さなかったことから、男女のアパシー構造は異なっている可能性が示された。すなわち、同じようなアパシーの症状を示しても、男性と女性ではその根本原因が異なっているかもしれないということである。特に病理としてのアパシーに関しては、男女で構造が異なる可能性が強く示されたため、治療の際に留意する必要があると思われる。

3. 今後の課題

本研究ではいくつか不明な点が残った。私立Y大生が国立トップX大生よりもアパシー傾向の分布の男女差が大きいこと、私立Y大学の男子学生に、アパシー傾向と学歴意識との間で負の連関が見られたこと、私立Y大学の男子学生は受験に努力しないほどアパシー傾向が高まるのに国立トップX大学の男子学生はそうではない、などの学校間の差の表れ方は、国立トップX大学と私立Y大学の学歴社会での位置づけの差では説明できない現象であったといえる。今後は学生の生活の場としての大学に対するイメージを調査すると共に、調査の対象とする大学を増やすなど、より包括的な検討を行う必要があると思われる。また今回の研究で女性のアパシーが男性のそれとは構造が異なることが示唆されていることから、女性のアパシー構造の検討も含めた包括的なアパシー研究を行うことが、今後の課題となる。

引用文献

- ・藤田秀典 1991 子ども・学校・社会—「豊かさ」のアイロニーのなかで。東京大学出版会。
- ・荻谷剛彦 2001 階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会へ。有信堂。
- ・荻谷剛彦 2002 教育改革の幻想。ちくま新書。
- ・水野忠文 1963 受験生の健康をめぐる問題。教育の時代。1963年3月号。東洋館出版社
- ・下山晴彦 1992 モラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—。教育心理学研究, 40(2), 121-129.
- ・下山晴彦 1997 臨床心理学研究の理論と実際。東京大学出版会。
- ・鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討—。教育心理学研究, 41(2), 200-208.
- ・土川隆史 1981 スチューデント・アパシー。笠原嘉・山田和夫（編）キャンパスの症候群。弘文堂。pp143-166
- ・Walters, P. A. J. 1961 *Student apathy*. In : Blaine, B. Jr. & McArthur, C, C, (Eds.), *Emotional problem of the student*. Appleton-Century-Crofts. 笠原嘉・岡本重慶（訳）1975 学生のアパシー。石井完一郎ほか（監訳）学生的情緒問題。文光堂。pp106-120.
- ・Weiner, B., Frieze, I., Kukla, A., Reed, L., Rest, S. & Rosenbaum, R. M. 1971 Perceiving the cause of success and failure. In E. E. Jones, D. Kanouse, H. H. Kelley, R. E. Nisbett, S. Valins & B. Weiner (Eds.), *Attribution: Perceiving the cause of behavior*. General Learning Press.
- ・山田和夫 1983 成熟拒否—大人になれない青年たち—。新曜社。
- ・山田和夫 1986 コミュニティ心理学。東京大学出版会。

The relationship between a belief in society which sets a greater value on the academic career of an individual than on his real ability and apathy tendency of university student

ANDO, Soichiro

The purposes of the present study were to investigate how a belief in the academic career has an effect on an apathy tendency of university student. First, two scales were constructed. One is for measuring degree of one's belief in the academic career (Belief in academic career scale), and the other is for measuring how hard one thinks he has made an effort to pass the university entrance exam (Effort to pass the university entrance exam scale). Next, Belief in academic career scale, Effort to pass the university entrance exam scale, Apathy mentality scale, Identity scale were administered to 251 freshmen of the best university and good university. The data were analyzed using likelihood ratio test. It was shown that the stronger belief in academic career scale was related to greater apathy tendency for male freshmen, and cause of apathy might be different between male and female students.

(人文科学研究科心理学専攻 博士後期課程3年)